



建築面積 : 368.762㎡(111.328坪) → 建築面積 : 372.915㎡(112.582坪)
 延床面積 : 435.745㎡(131.550坪) → 延床面積 : 439.463㎡(132.672坪)

和田のすずき家 ~古民家の新しいかたち~

建築地は静岡県西部に位置し、屋敷から少し南に旧東海道が東西に走り、それと並行するように北側には国道152号線が通っているが、いっほ道を入れば部分的に畑なども残る閑静な住宅街である。

すずき家は、表門・主屋・はなれ・土蔵・付属屋・内門及び塀・内庭などから構成される郷土屋敷構えを現在も残す住宅である。主屋とはなれは雁行する形をとり、明治37年建築のはなれは、奇棟屋根の2階建てで、1階2階共に10帖と6帖のオザシキに3帖の前室の平面構成を持ち、大正2年建築の主屋は、切妻屋根に重厚な野物の梁組みを持ち、ドマとオザシキ、ナンドの3つの平面構成を持ちます。14代ご当主により、6年前に東の土蔵を、2年前に西の土蔵の改修を終え、今回主屋・離れと納屋の改修を実施しました。

外観は出来るだけそのままに、保護のための壁漆喰塗りと木部古色塗装を行った。内部については古民家の寒いを解決するため、まずは古民家の代名詞でもある通風系の高い床下空間を閉じ、室内空間化し空気循環の効果を損なうことが無いように、室内側で断熱と気密を確保し、窓については外観の木製建具の雰囲気と崩すことの無いように内窓を設置した。空気循環する際に、床下エアコンを足すことで穏やかな床暖房効果をつくり出している。加えて土壁が薪ストーブの輻射熱を蓄熱する。そんな改修が古民家の寒いを克服しています。

古民家の屋根瓦下の土と、壁の土の遮熱と調湿の効果が夏期の暑さ対策に有効なことを活かして、そこに新たに断熱と気密、輻射熱の効果を加え、すずき家は「新しい古民家かたち」を実現しました。



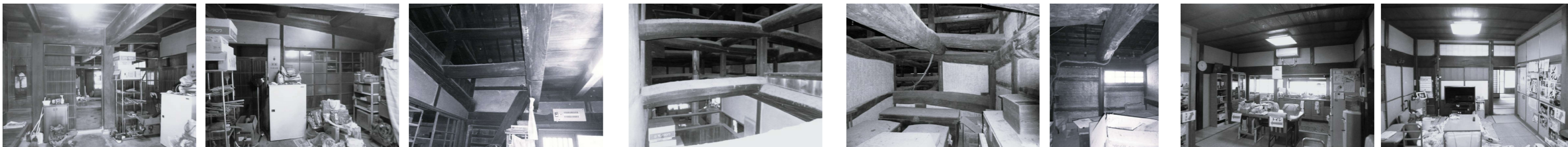


かまどのある三和土土間の「内どま」は、その昔の改修で一部板張りされ、流しや収納棚が増設され使われていたようです。天井は張られてなく、大黒柱に刺さる大きな梁や、二重三重に重なる堅牢な丸太梁組みが見られています。



かまどは新ストーブに姿を変え、かまどを形づくっていた耐火レンガは、東屋のBBQコンロに、大中小の三つの羽釜もここで使われ続けていくこととなりました。かまどを仕上げていた化粧レンガは、新ストーブ背面に遮熱壁として使われています。東屋には長年使われていなかった井戸もタイル流し台と共に今回復旧しました。丸太梁は水洗いし米ぬかで磨かれ、漆喰壁も塗り直され、三和土土間だった「内どま」は玄関土間より少し高く床張りされ、クッキングストープのある食堂台所に少しだけ姿を変えました...





正面の二本の大黒柱、大きな梁と堅牢な丸太梁組みが印象的な玄関ドマからは、梯子階段を使い小屋裏部屋へ上がることができます。小屋裏から見える小屋梁の丸太組みも圧巻です！！ 北の縁側は台所に改修されおかつてとして使われていました。



大黒柱と大きな梁、丸太梁は水拭きされ米ぬかで磨き上げられ、土間は断熱され少し嵩上げされ墨モルタルで仕上げられました。玄関サッシは取り外され、使われてなかった大戸を蔵戸風に改修して復活させました。じょちゅうべやは玄関収納に、梯子階段もまわり階段にかけ直し、小屋裏部屋にもスムーズに昇降出来るように... 小屋裏部屋はご主人の秘密基地に。屋根の室内側にはアルミ遮熱シートを張り日射熱や冷放射を跳ね返してもらいます。おかつては北の縁側を復活させ、北庭に視線を広げ、天井も1/3ほど取り外し、勾配天井として梁組みを見せダイナミックな空間の居間として生まれ変わりました。





雁行する主屋とはなれば内庭に面します。主屋がまだかや葺きだった頃増築されたようで、高さのあるコンクリート束石の上に土台が乗せられていました。離れ2階の一段上がったまわり縁からの内庭の眺めは圧巻で非日常を感じられる空間です。



屋根と外壁はそのままに、壁の漆喰塗りと木部は古色塗装で仕上げを保護。今回改修では古民家の寒いを解決するため、まずは通風系の高い床下空間を閉じ、土間コンクリートと充填断熱で室内空間化し空気循環させます。そこに床下エアコンを加えることで、冷たかった床は穏やかな暖かさを感じる床に...小舞土壁の透気・透湿・調湿の効果を遮ることなく、土壁の内側にポリエステル断熱材を充填し、可変透湿気密シートで隙間風を防ぐ。木製建具の内側には内窓&ハニカムサーモクリーン...この壁構造が、古民家の透湿・透気・調湿・蓄熱の効果を引き継ぎ、新たに断熱・気密を加えることで、季節を問わず一年中快適な空間をつくり出すことが出来ます。

